

研究成果中間報告・追補

諸般の事情により、過日刊行された『研究成果中間報告』に掲載できなかった中間報告の原稿を四点ここに掲載いたします。

「古典学の再構築」総括班

77 A01班・公募研究

チベット仏教ゲールク派(dGe lugs pa)の二諦説の解釈

研究代表者 森山 清徹
佛教学部 教授

【要旨】

以下のチベット仏教学説綱要書(Grub mtha')の翻訳と分析を通じ、インド大乘仏教からチベット仏教に一貫する思想を、二諦(二真理)すなわち世俗諦と勝義諦の関係を探求する視点から解明を試みるものである。

カダン派

チャパチョキセンゲ(Phya pa chos kyi seng ge, 1109 - 1169): dbu ma shar gsum gyi stong thun 『東方自立中観論書の千の投与』

ゲルク派

ツォンカパ(Tsong kha pa, 1357 - 1419): Lam rim chung ba 『菩提道次第小論』, dGongs pa rab gsal 『中観意趣善明』

ケードツブジェ・ゲレクペルサンボ(mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po, 1385 - 1438): sTong thun chen mo 『千の投与』

ジャンヤンシェバ(Jam dbyangs bzhad pa, 1648 - 1721): Grub mtha' chen mo 『大学説綱要書』

ガワンパルデン(Nga dbang dpal ldan, 1797 - ?): Grub mtha' bzhi'i lugs kyi kun rdzob dang don dam pa'i don rnam par bshad dpyid kyi dpal mo'i glu dbyangs 『四学派の教義における世俗諦と勝義諦の解説』

二諦(世俗諦と勝義諦)の関係の仕方は、空、無我という点では同一であるが、その両者は相互に排除し合う対立関係(viruddha)にある。したがって諦(真理)は二に限定され第三の諦はありえない、という点では、二諦は排除(ldog pa)による区別のあるものである。この点が、論理(Yukti)の面からは、インド自立中観派のカマラシーラ(c.740 - 797)の『中観光明論』に現れる離一多性を立証因とする無自性論証において、能証と所証は共に絶対否定(med dgag)である点では同一であるが、排除による区別が成立し、理解させるもの(gamaka)、理解されるもの(gamya)であり得る、というアポー八論から導かれている。聖教の面からは、『解深密経』における二諦は、同一でも別でもないとの説示を典拠として導かれる。『解深密経』を典拠とすることも『中観光明論』に説かれるものに依存している。チャパによる二諦説の吟味は、その後、ツォンカパを始めとするゲールク派の伝統として継承されることになる。その典拠は、カマラシーラの『中観光明論』である。

ツォンカパを始めとし、ケードツブジェ、ジャンヤンシェバ、ガワンパルデンらのゲールク派の伝統として、彼らは二諦(世俗諦と勝義諦)の関係の仕方を問うている。それによれば、二諦は空性、無我という点では共に同一な本質を有するのであるが、雑染と清浄という煩惱の有無という点及び知の整合性という点では、相矛盾するものである。この相互矛盾である下位概念としての二諦を上位概念である空性により統一あるものとしている。この論理はダルマキールティのアポー八論により、聖教としては『解深密経』により導かれる。さらに、彼らが直接の典拠としたものはカマラシーラの『中観光明論』である。

ツォンカパを始めとするゲールク派の伝統としての上記の二諦の関係の仕方の解釈は、チベットにおいてツォンカパが、インドのカマラシーラの『中観光明論』に負いつつ導き出したものと当初、想定していたのであるが、ツォンカパよりも、さらに250年程逆上ったチャパチョキセンゲの『東方自立中観三論書の千の投

与』の中に、その起源のあることが明らかとなった。チャバが自立中観派のカマラシーラの『中観光明論』に基づいて考察し、このチャバの考察が、ゲールク派に継承されたものである。

チャバの著したテキストは数多くあったと伝えられるが、つい最近までそれらのテキストは、いわば幻のテキストとされ現存するものは皆無であった。ところが近年(1999年)、ウィーン大学チベット研究所のタオシャ氏(Helmut Tauscher)により冒頭に示したチャバの著作のチベット語テキスト及び序文が出版された。筆者はこのテキストを解読することから新発見を数多く得た。新資料を整理しいち早く提供することは、学ぶところであるが、その思想背景の研究はほとんど未解明である故、解読を進めている。

【位置付け】

一般にインド成立の文献のチベット語訳とは別に、チベット人あるいはチベット成立の文献を蔵外文献と呼び区別するのであるが、本研究において扱う一群の仏教の学説網要書といわれるものも、その蔵外文献としてのものである。元来それらの文献は入手し難いものが多かったが、最近は出版やマイクロフィッシュなどから比較的入手しやすくなった。

それらの学説網要書は、直接はインド成立ではないにせよ、極めて忠実にインド文献を拠り所としている。したがって、本研究においては、チベット文献を独立に扱うのではなくインド文献、インド仏教思想に照らし合わせて理解することを研究方法の基礎とする。

ナーガールジュナ(c.150 - 250)は、主書『中論』(24章8, 9偈)でブッタにより説かれた教えは全て二諦(二真理)に基づいて説かれている。すなわち世俗の真理(世俗諦)と究極的な真理(勝義諦)とである。これら二真理の間の相違を理解しない人々はブッタの深遠な教えを知り得ない」と表明している。したがって、ナーガールジュナは無論、ブッタの教えを正しく理解しようとするチベット仏教徒にとり二真理を熟知することは極めて重要であったことは疑い得ない。

この研究テーマを扱うものとしては、

Jeffrey Hopkins. *Meditation on Emptiness*. London: Wisdom, 1983.

Donald S. Lopez, Jr.. *A Study of Svātantrika*. New York: Snow Lion, 1987.

Guy Newland: *The Two Truths*. New York: Snow Lion, 1992.

何れもチベット学説網要書原典からの部分的な翻訳

を含めた優れた研究であるが、二諦(二真理)相互の関係という問題に限定した場合、それらの研究において不足していると思える点は、チベット仏教ゲールク派の伝統を十二分に跡付けるといふ点に及んでおらず、限定されたテキストでの解明であること。さらには最も不足していると思われる点はチベット仏教の領域で検討している点が多く、最も重要と思われるその背景を明確にするためのインド仏教原典への指摘が極めて少ないことである。それは出典の同定としてではなく思想的背景の解明という点においてである。したがって、チベット仏教の原典を扱いつつも、思想的背景としてのインド仏教テキストへの言及が不可欠と思われる。そのことにより初めて思想的背景の解明がなされ、伝統と思想史が明確になるものと思われる。したがって、そのチベット、インド両領域をそれぞれ個別的な視点で把握するのではなく、チベット仏教ゲールク派の思想史及びその背景としてのインド仏教の両者を不可分のものとする視点を方法論として解明を試みるものである。

【研究成果】

以下その具体的な内容の要点を示す。

ツオンカバ(1357 - 1419)は『菩提道次第小論』(Lam rim chung ba, LRCB)、¹⁾『中観意趣善明』(dGong pa rab gsal, GR)、で二諦(二真理)すなわち世俗諦(日常的真理)と勝義諦(最高の真理)の関係を、以下の視点から検証している。

二諦の区分に三種がある。

- 1) 壺と布のように自性が異なるもの
(ngo bo tha dad pa)
- 2) 作られたものと無常なもののように自性は同一であるが排除する対象が異なるもの
(ngo bo gcig la ldog pa tha dad pa)
- 3) 一方を否定する区別
(gcig pa bkag pa'i tha dad pa)

この3)は二諦を、有と無の如く相互に排除し合う、対立関係(viruddha)、正反対のものとする見解である。

それらのうち、2)の二諦は同一の自性を有するが、排除する対象が異なるものと結論付ける。それは、唯識派から中観派の自立派、帰謬派に共通するすなわちインド大乘仏教の論理を背景としている。すなわち、二者は共に無我という点で同一性の関係にあっても、全くの同義語というわけではなく、相互に排除し合うという点での区別を有するというものである。これは、大乘仏教の空、二真理の論理そのものである。

1) の見地は、ジョナンパ (Jo nang pa) の、またガワンパルデンによれば、アビダルマ仏教の毘婆沙師や経量部のものである。3) はゴク・ローダンシェーラブ (Ngok blo ldan shes rab, 1059 - 1109) の見解とされる。

ツォンカパは、その二真理の関係 2) を以下の二方法により導く。

1. 論理による方法としてカマラシーラ (c. 740 - 797) の『中観光明論』に表明されるアポー八論に基づいている。

アポー八論とは、木と桜の場合のように、本質は同一なのではあるが、木は非木から排除されたものであり、桜は非桜から排除されたものという、両者は排除する対象が異なるものである。この理論を二諦の区分を検証する際に適用する。

2. 聖教による方法としてカマラシーラの『中観光明論』に引用される『解深密経』の見解から二諦は同一でも別でもないとする点を踏まえている。すなわち もし、勝義の特徴が、有為なるものと別でないなら、その場合、あらゆる凡夫が真理を見ることになる。もし、勝義の特徴が、有為なるものと別であるなら、真理を見る人々は有為の因習を克服し得ないであろう。

貝などにとっての白さなどのように勝義の特徴は有為と同一である、あるいは別であると表現できない。『中観光明論』(P261a7 - 262b1, D234a3 - b7)

このことは、ツォンカパ以下ケードツブジェ (1385 - 1438), ジャンヤンシェーパ (1648 - 1721), ガワンパルデン (1797 - ?), ダライラマ14世に至るチベット仏教ゲールク派の伝統であることが彼らの著作の上から確認され得る。

ケ - ドツブジェ : sTong thun chen mo (TTC) 『千の投与』 Thousand Doses

ジャンヤンシェーパ : Grub mtha' chen mo (GTCM) 『大義書』

ガワンパルデン : Grub mtha' bzhil'i lugs kyi kun rdzob dang don dam pa'i don rnam par bshad pa legs bshad dpyid kyi dpal mo'i glu dbyangs (GTZL) 『四学派の教義における世俗諦と勝義諦の解説』

ダライラマ14世 : The Opening of the Wisdom-Eye, 1971.

その論述の根拠としては、

1. 2. 共にカマラシーラの『中観光明論』における論述が事実上の考察の原点となっている。そのさら

なる背景としては、1. そのアポー八論は、カマラシーラ自身がゲールキルティ (c. 600 - 660) のアポー八論に依っている。それは、ガワンパルデンの『量評釈』第一章 k 40 - 42への言及からより明白となる。そこに示されるアポー八論が根拠となり、二諦の関係は 作られたものと無常なもののように自性は同一であるが、排除する対象が異なるもの (ngo bo gcig la ldog pa tha dad pa) と規定される。この点をさらに解釈するならば、絶対否定のアポー八論により勝義不生、世俗不生という不生という点で勝義と世俗の同一性が導かれる。相対否定としてのアポー八論により世俗生起、勝義不生が成立し、それらの間には 世俗生起であれば、勝義不生である。例えば幻のように。という論理的必然性 (遍充) が成立する。世俗は勝義を排除することにより、勝義は世俗を排除することにより成立するわけであるから、勝義と世俗には排除する対象が異なるという区別が成立する。

1. 2. 共に典拠となる経論に対する評価が中観派内でも自立派と帰謬派とでは異なる。特に 2 『解深密経』の論述を自立派は、最後の法輪 (khor lo tha ma) として、一切法は真実としての無を説いていると認めるに対し、帰謬派はそのようには認めず、帰謬すなはち自性が別、排除が同一と仮定した場合に導かれる矛盾の指摘であると解釈する (GTZL 78b3 - 7)。この点が帰謬派を最重視するツォンカパ以下のゲールク派の伝統を表し、彼らは、むしろ 2. による結論を唯識派が拠り所とする『解深密経』よりも『般若経』やナーガールジュナ (c. 150 - 250) の見解から導こうとしている。しかし、このことがかえって事実上、自立派カマラシーラの『中観光明論』を通じ、アポー八論や『解深密経』に依存して、二諦説の関係を吟味する方法を取りつつも、帰謬派を重視するゲールク派の伝統を堅持しようとする姿勢を顕にしているといえよう。

以上のツォンカパを始めとするゲールク派による二諦の区分に関する解釈に先行するものとして以下のものがある。そこにおいても、上に見たゲールク派の『学説綱要書』群から得られた解明を、そのまま適用し得るものに以下のものがある。

カダン派 (bKa' gdam pa) のチャパチヨキセンゲ (1109 - 1169) による dbu ma shar gsum gyi stong thun (ed. by Helmut Tauscher, Wien 1999) 『東方自立三中観論書の千の投与』は、貴重なテキストでもあり、資料的価値は極めて高い。したがって、チベット語テキスト、梗概及び序文をつけて出版された Helmut Tauscher 氏の研究から多くのものを得たのではあるが、翻訳及び十分な研究は今後のことであり、現

時点においても内容の分析、背景の解説に乏しいという憾がある。

そこで筆者自身が翻訳、分析した結果得られた結論を以下に要約しておく。

まず東方（ベンガル）自立中観三論師および論書とは、次のものである。

ジュニヤ - ナガルバ(c.700 - 760):『二諦分別論』
シャーンタラクシタ(c.725 - 786):『中観莊嚴論』
カマラシーラ(c.740 - 797):『中観光明論』

二諦の区分の考察は以下の順に進められる。

A. 論理による検証

1. カマラシーラの『中観光明論』に依存している。

B. 聖典による検証

2. 『解深密経』及び

3. ナーガールジュナの『菩提心論』を典拠として検証している。

したがって、ツォンカバ(1357 - 1419)より250年ほど先行するチャパは、ゲールク派の伝統に先行して二諦の区分の検証方法を示している、といえる。

A. 論理による検証部分の分析

カマラシ - ラの『中観光明論』に現れる離一多性を立証因とする無自性論証の問題としての証明するもの(能証, 離一多性)と証明されるもの(所証, 無自性)の否定の特徴すなわち絶対否定(med dgag)であるか、相対否定(ma yin dgag)であるかを巡る検証と、同じく『中観光明論』における二諦の区分に関する検証とを合致させて論じる最初のものと思える。これが、恐らくツォンカバにより二諦の区分の検証や二諦説の考察そのものの方法論として導入され、その後のゲールク派の伝統を形成する依り所になったものと考えられる。

さらに詳しく論理による検証を分析するならば、離一多性なる立証因によって証明されるもの、すなわち無自性は真実なる存在と相対立する。その否定が、絶対否定であるか、相対否定であるかが問われる。

絶対否定とは、青であることを否定しても、黄色であることや赤色であることが肯定されることのない、単なる否定を意味する。他方、相対否定とは、非青を否定すれば、青が肯定されるような場合である。

絶対否定(単なる否定)の場合であっても、勝義諦と同一とも別ともいい得ない世俗諦を退けることはない。所遍も能遍も、空という絶対否定と同一とも別ともいい得ない世俗諦として存在する。したがって、無自性論証は可能となる。

否定が、相対否定の場合であっても、真実なる存在

が成立するわけではない。

以上から、3)二諦は一方を否定する区分とはいえない。また1)二諦は自性が別であるともいい得ない。なぜなら別であるなら、世俗(有為)を吟味した後に吟味に耐え得る存在(勝義)が知られ得ないからである。

チャパチョキセンゲも、二諦の関係の仕方は、2)自性は同一であるが、排除する対象が異なるものと結論付ける。この吟味の方法と結論はツォンカバを始めとするゲールク派に継承されたといえよう。これらは、チャパが、自己のテキスト名に冠する 東方自立三中観論書 の一つカマラシーラの『中観光明論』を典拠として創設したものと見えよう。

なお3)はゴク・ローダンシェーラブの見解とされ、それをチャパが批判的に吟味している点については継続して調査する。

[位置付け:当該の現代における価値]

神をもたない宗教である仏教は、究極的な神一元論でもない。他方、日常的な思考、原則としての対立関係としての二元論に終始するものでもない。

有と無の如く相互に排除し合う対立関係(viruddha)すなわち第三者の存在する余地のない矛盾(contradictory)概念という関係にあるもの二諦が、空や無我といういわば上位概念あるいは類概念(genus)という点では同一の類に属し同一性をもつということ、対立関係が対立のまま固定化されるものではないということである。換言すれば、その二項の関係は全く同一なのでもなく、全く別なのでもないということである。しかし、この論理は、我々の一般的に慣れ親しんだ思考パターンの中に入らないものであろう。一般的思考法からすれば、一定な立場を堅持しない、上に示したような見解は矛盾とも非論理的ともいえよう。しかし、一定の見地を堅持することは、価値の固定化、序列化、差別化を助長するともいえ、対立を対立のまま固定化させる傾向をもつともいえよう。

先の仏教の論理が、現代にアピールするものといえれば、それは価値の固定化と序列化が生む思考の枠組の硬直化へのアンチテーゼであろう。すなわち思い込みとしての思考の枠組に対する批判的検証を通じてのみ真相が真相として把握され得るという「空」の論理であろう。それは、2,500年変わることがない伝統としてあり、このことが古典としての仏教思想がもつ現代への意義といえよう。

近世ペルシア語によるイスラーム世界史 記述の展開に関する古典文献学的研究

研究代表者 井谷 鋼造

追手門学院大学文学部 教授

【要旨】

(1) イスラーム文明圏においてイスラーム出現以前から独自の高度な文化を有したイラン地域において、イスラームが持つ世界観や歴史観がどのようにそれまでのイラン的な歴史と融合され、イラン・イスラーム的な歴史が書かれるようになったのかを古典文献の研究を通じて明らかにすること。

(2) 上記の目的のために、13世紀の後半に書かれたカーディー・バイダーウィーの著作『諸史の秩序』という史料の古写本を解読することで、当時の知識人が有していた一般的な知識としての「歴史」の具体像を明らかにすること。

(3) 上記の史料の著者バイダーウィーについての伝記的な情報を整理し、問題点を指摘すること。

【位置付け】

(1) カーディー職にあった、イランはファールス地方のバイダー出身のバイダーウィーによって、1275年にペルシア語で書かれた『諸史の秩序』Nizam al-Tawarikh は、14世紀初めにイランのモンゴル政権であるイルハン国の宮廷で編纂され、当時の世界の民族史を集成した画期的なペルシア語の歴史書『諸史の集成』(日本では『集史』と通称される)の成立に先立って書かれた分量もさほど多くない、簡略な世界史である。英国の研究者 E.G. ブラウンがその著書『ペルシア文学史』第3巻の中で酷評したために、その後信頼のおけるテキストも刊行されておらず、部分的に引用、利用されることがあっても文献全体の構成や内容が紹介されることもなかった。

(2) 本研究を開始するまでに研究代表者はこの史料の著者や諸写本の所蔵状況に関する問題点を検討した上で、この史料中のセルジューク朝に関わる部分を、1347年に筆写されたイスタンブル所在の一写本(Aya

Sofya 3605)に拠って日本語に訳出し、訳注を付して発表している。本研究を開始してからは、特にこの写本のイスラーム以前の歴史を扱った冒頭部分を集中的に解読、研究して以下にまとめたような研究成果を得た。

(3) 西アジア地域において独自の高度な文化を有したイラン地域において、西暦7世紀以降に普及していったイスラーム的な世界観、歴史観がイスラーム以前のイランの歴史観や世界観とどのように関わり合いながら、またそれらをどのように融合、吸収することで今日のイラン・イスラーム的な文化を生み出していったのかを解明することはイランの文化史を文献的に研究する上で非常に重要なポイントである。また今日のイラン・イスラーム的なナショナル・アイデンティティが形成される上でイラン的伝統の歴史がイスラームという神教の歴史観とどこで接点をもつかを理解しておくことは避けては通れない大切なステップであると考えられる。このような問題点を解明する上で、バイダーウィーのペルシア語史書『諸史の秩序』の古典文献学的研究は、ささやかながらも重要な示唆を与えてくれる現代的な意味を有している。

【研究成果】

研究を遂行する過程で研究代表者は2000年3月イギリスとトルコ共和国に出張した。主張の目的は(1)上記のペルシア語史料『諸史の秩序』の写本所蔵状況を調査することと、(2)写本の筆跡や表現上の問題点を解明するためにトルコ共和国内での13~15世紀の石刻アラビア文字碑文を実地に調査して研究することが目的であった。(1)に関しては『諸史の秩序』最古の写本(1314/5年筆写)がトルコ共和国マニサ市の公共図書館に所蔵されていることは既に判明していたが、イスタンブルを除いてトルコ共和国では地方の図書館はマイクロフィルムを作成する設備などが整っていないために、マイクロフィルムは文献を図書館の職員の手でイスタンブルのスレイマニエ図書館に移送して作成せねばならず、かなりの時間と手間がかかるため今回の出張期間では不可能であった。このマニサ写本については今年度に改めてマニサ市まで出張し、現物を調査した後にマイクロフィルムの作成を依頼することを計画している。その際現地では現有のイスタンブル写本に基づくテキストの素案を持参し、写本研究上の問題点をつぶさにチェックする予定である。

(2)に関しては約1週間トルコ共和国のコンヤ、ニイデ、アクサライの3都市をめぐり、博物館やジャーミ、マドラサ、キャラヴァンサライなどの歴史的建造物でかなりの数の碑文の現物を調査し、写真撮影に

より資料を収集した。碑文調査の過程で発見した一つの成果は、コンヤ市の中心部にあるイプリクチ・ジャーミの壁面にあった碑文中に、『諸史の秩序』のイスタンブル写本と同一のコピスト(ムハンマド・ブン・アルハサン・アルカーズィルニー)の手で写され、『諸史の秩序』と合冊された、シーア派の神学者ナスィール・アッディーン・アットゥースィー(1274年没)の著作『イルハンのタンスーフ・ナーマ』の末尾にある奥書の記年中に現れる asabb という表現と同一のものを見出したことである。上記ジャーミの碑文によれば、このマスジドはヒジュラ暦733年のラジャブ月中旬(西暦1333年3月28日~4月6日)に再建・拡張されたとのことであるが、碑文の中でのラジャブ月の部分は shahr Allah al-asabb Rajab と記されており、「神の(慈悲が)降り注ぐラジャブの月」の意味である。Aya Sofya 3605 写本の『タンスーフ・ナーマ』末尾ではヒジュラ暦748年ラジャブ月11日(西暦1347年10月17日)という日付が現れ、この部分のラジャブ月に同じく「(慈悲が)降り注ぐ」の意味の al-asabb という形容辞が付されている。研究代表者は写本のこの部分の読みと意味について以前から少しく疑問を持っていたが、今回この碑文を検分し、同じ表現・字形が用いられていることを発見して疑問が氷解した。このジャーミの碑文と『諸史の秩序』イスタンブル写本の作成年代が近いこともあるが、文献研究において紙に書かれた写本と石刻の碑文研究が相互補完的な関係にあることを実感させられた一例である。

『諸史の秩序』のイスタンブル写本を解読する過程で得られた研究成果の一部を以下に示す。バイダーウィーのイスラーム世界史に関する著作『諸史の秩序』において、研究者が最も関心を持っていたポイントは、イスラーム的=旧約聖書の歴史観がイランの伝統的な歴史観と何処で接点をもち、イスラーム以前のイランの歴史がどのようにイスラーム的歴史の中に位置づけられているかという点にあった。具体的な例として、伝統的にイランの最初の帝王とされるカユマルスという人物が作品中どのように位置づけられているかという問題があるが、『諸史の秩序』の第一部はアードムからヌーフ(ノア)までを扱い、第二部ではカユマルスに始まるイスラーム以前のイランの王統がサーサーン朝の終わりまで述べられている。第二部の冒頭に置かれたカユマルスに関する記述の冒頭は次のように書かれている。

カユマルス 最初の帝王。史家たちは一致して、帝王の位とそのしきたりを世に最初にもたらした

のは、カユマルスであったという。ムグ(マギ)たちは彼はアードムのことだと言うが、他の史家たちは彼らを信じない。それどころか世界のイマーム・アブー・ハーミド・ムハンマド・ブン・ムハンマド・アルガザリー 神が彼に慈悲を与えるように は『諸王の忠言』の書の中で、彼はシース(シェト)の兄弟であるとしている。他の一団が言うには、彼はヌーフ 彼の上に平安あれの子孫であるというが、これはより明らかである。

(Aya Sofya 3605写本107b)

として、アラブの系譜、アジャム(ペルシア)の系譜、イスラエルの民(ユダヤ民族)の学者たちの説を援用して、イランの最初の王カユマルスはヌーフの子、サム(セム)であると結論している。バイダーウィーによれば、イラン最古の帝王カユマルスは、旧約聖書創世記中の大洪水によって有名なヌーフの子ということになり、伝統的なイランの王統はこの接点によって旧約的=イスラームの歴史観の中に位置付けられる。まだ比較検討が充分ではないが、今までの研究の範囲では、この説は他のペルシア語史書の中に見えない。今後の研究によって、ヌーフの子=カユマルス説の根源を探求したい。上記の引用では、カユマルスの系譜に関して、ムグ(マギ)たち、すなわちゾロアスター教の司祭たちの意見や、11~12世紀のイスラーム世界を代表する大学者ガザリーの説が参照されている。ムグたちの意見に対してバイダーウィーは否定的だが、ガザリーの説に対してはそれを挙げるだけで、論評はしていない。現行のガザリーの著作『諸王の忠言』のテキスト(ジャラール・アッディーン・フマーイー校訂,テヘラーン,1350,85 9頁)によれば、カユマルスは人類の祖、アードムの子で、シース(シェト)の兄弟とされており、バイダーウィーの引用との間に矛盾はない。すなわち、バイダーウィーはカユマルスの系譜をイスラーム的な歴史観の中に位置付けるに当たって、先行する大学者ガザリーの著作を参照しているが、結果としてはその説を採用していないということになる。バイダーウィーの記す「史家たち」が具体的には誰なのかは、『諸史の秩序』全体を通じて明らかにされていないが、このカユマルスの系譜をめぐる記述の中にはそれを窺わせるような引用が僅かにあるとすることができる。今後の文献研究の課題として、バイダーウィーが参照したと思われる情報源の推定と、具体的にそれらの情報源にある記述がバイダーウィーによりどのように取捨選択されていたかを探求することを設定したい。

インド大乘仏教瑜伽行学派における聖典 (アーガマ) 継承の研究

雑阿含から撰事分へ

研究代表者 早島 理
滋賀医科大学 教授

【要旨】

インド大乘仏教瑜伽行学派は、あまたの阿含聖典のなかから、雑阿含経典を中心に自派の思想形成の拠り所となる聖典を取捨・選択した。それらの聖典は「撰事分」として集約され継承されている。

本研究では『瑜伽師地論』「撰事分」、『顕揚聖教論』「撰事品」を中心に、瑜伽行学派が自派の思想を確立する過程でなされた聖典の継承と受容の一端を明らかにする。

【位置付け】

インド大乘仏教瑜伽行学派の大成者と目される無著(Asaṅga, ca.315-390)の著作である『顕揚論』は、玄奘訳で漢訳にのみ現存する。このテキストは、同じく無著の著作である『攝大乘論』(*Mahāyānasamgraha)、『大乘阿毘達磨集論』(Abhidharma-samuccaya)とともに、瑜伽行唯識思想の理論と実践と形而上学とを余すところなく総合化・体系化したものとして知られている。しかし他の二論書と異なり、漢訳のみそれも玄奘訳一本しか現存しないこともあり、『顕揚論』の解読研究は遅々として進展していないのが現状である。多くの場合本書は、伝統的に継承されてきた瑜伽行の修行体系と実践(瞑想)方法およびその理論とを集大成した『瑜伽師地論』の「綱要書」としてのみ位置づけられてきた。この論書の重要性を、「攝事品」を中心に、聖典(アーガマ)の伝承と受容の視点から再度検討しなければならない。それは、聖典が本来有する意味と価値との、この学派における再生、蘇りを追求することであり、さらには、聖典(アーガマ)を現代に継承する意義を提示することにも繋がるからである。

【研究成果】

1999年度から2000年度前半にかけて、本研究者は次の研究活動を行った。

(1) 『顕揚論』の解読研究を第一章「攝事品」、第七章「成無性品」を中心に進め、両章の註記付き書き下し文の草稿を作成した。

(2) この解読研究に際して、『顕揚論』が依拠した聖典(阿含経典・大乘経典)及びこの学派にとっての準聖典である『瑜伽師地論』からの引用を原典に同定する作業を行った。

(2-1) 『顕揚論』(および瑜伽行学派の諸論書)にとって、『瑜伽師地論』は論書でありながら準「聖典」として扱われる。『瑜伽師地論』の背後にある個々の「聖典」の存在を当時の人々は当然のこととして承知していたからである。

(3) 『顕揚論』が聖典を受容・継承し、それに依拠して自学派の教義を確立した例を、系譜ごとに分類して示す。

{A} 『顕揚論』が雑阿含を教証として継承・受容したケース

『顕揚論』第一章「攝事品」には教証として雑阿含もしくは中阿含経典が多々引用される。今は、「攝事品」を受けて、その「勝れた決擇」をするために第十一章「撰勝決擇品」が教証として雑阿含を引用する例を提示する。

第一章「攝事品」の「九事」中第六「覚分事」の最初は「四念住」が説かれる。その教証は広義の定義、「四念住とは、一に身念住なり」(vol.2,488b)のみである。この四念住に対する「勝決擇」は第十一章「撰勝決擇品」の第六「覚分事決擇」の第35偈「四念住決擇」(vol.19,213b-214a)であるが、経典引用とその解釈からなる。すなわち教証としての雑阿含経典の引用(「比丘尼經」「取自心相經」「鸚經」、それぞれ615 Bhikkhū, 616 Sūdo, 617 Sakuṇagghi に対応)及びその教義解釈としての四念住の具体的な修習次第とである。さらに、この四念住の修習次第が『瑜伽論』「撰事分中契經事菩提分法擇攝」の「四念住」(vol.97,860c-861a)に基づくことに留意すべきである。

つまりこうである。瑜伽行学派は、雑阿含経典(上記三経典)をこの学派の修習体系(四念住)にそって教義解釈を施した。その集積が「撰事分」(「菩提分法擇攝」中の四念住、ただし具体的な引用経典名などは周知のこととして省略されている)である。『顕揚論』「攝事品」は主題として「四念住」を提示し、その具体的な内容を「撰勝決擇品」(上記三経典名・断片引用と『瑜伽論』「菩提分法擇攝」に基づく教義解釈)で

展開する。略図的に示すと、
 雑阿含 『瑜伽論』『攝事分中契經事菩提分法擇』
 『顯揚論』『攝事品』/同『撰勝決擇品』
 となる。

{ B } 『顯揚論』が他の經典を教証として継承・受容したケース

① 般若經典から『顯揚論』へ

「般若經の二諦説」と称される「世俗・勝義の二諦に基づいて仏法が衆生に説かれる」と云うテーマを、『顯揚論』『撰淨義品第二』(第3偈)はいわゆる大品系般若經(A.D.100-300?;大般若波羅蜜多經,放光般若經などに典拠)から継承する。重要なことは、『顯揚論』が世俗・勝義の二諦の枠組みのもとに三性説を説いていることである。「三性説」というこの学派固有の根本教義が聖典に基づくこと、すなわち仏陀の直説であることを主張しようとしたのである。なおこの「般若經の二諦説」が『中論』第24章第8偈にも説かれることはよく知られている。

② 『解深密經』から『瑜伽論』『攝決擇分』、『顯揚論』『撰淨義品』へ

仏陀の眞実を伝えるため、瑜伽行学派は、世俗・勝義の二諦とともに、「盡所有性(ある限り, yāvad-bhāvikatā)・如所有性(あるがまま, yathāvad-bhāvikatā)なるキーワードを提示する。この「盡所有性・如所有性」を媒介の一つとして三性説が説かれるに至るのである。

「盡所有性・如所有性」は『解深密經』・『瑜伽論』『本地分,菩薩地』に初出し、この考えは同『攝決擇分』、『顯揚論』『撰淨義品』へと継承される。同時に『瑜伽論』『本地分,菩薩地』に対する「菩薩地攝決擇」から『顯揚論』『撰淨義品』へ継承される中で、三性説が説かれるに至っている。

(4) 以上の研究成果の一端は『顯揚聖教論』における三性説管見(戸崎宏正博士古希記念論文集『インドの文化と論理』九大出版会(2000)所収)として公表された。

またこの学派に継承された聖典を、高齢化問題の視点から考察したのが、「高齢者環境の再生」(長崎大学公開講座叢書12『地域環境の創造』,長崎大学生涯学習教育センター 2000)である。

(5) 瑜伽行学派が雑阿含經典に多く依拠し、それが『瑜伽論』『撰事分』,さらには『顯揚論』『撰事品』などに継承されてきたことは周知の如くであるが、個々の經典の継承に際してなされた変容の過程の解明は不明な点が多い。今後の課題である。

「悪霊」表象から見た古代地中海世界の社会史

研究代表者 大貫 隆

東京大学総合文化研究科 教授

【要旨】

本研究は古代地中海世界のさまざまな文化圏において、庶民の日常知と生活行動を規定した「悪霊」表象に焦点を当てる。これまでのところ、可能な限り広範囲の文化圏から該当する資料(主として文献資料)を蒐集・分析してきた。すなわち、初期ユダヤ教、初期キリスト教、およびギリシア・ローマとエジプトの宗教文化における悪霊表象の間の差異と相互干渉を明らかにし、そこからマタイ12,43-45/ルカ11,24-26に見られる「汚れた霊」についての不可解な記述の謎を解くために、一つの仮説を提示するに至っている。

【位置付け】

本研究が対象とするのは、傑出した個人の才能によって生み出され、現在まで読み継がれ、人類の共通の至宝となっているような「古典」作品ではない。むしろ、キリスト教起源の前後数世紀にわたる地中海世界のさまざまな文化圏において、匿名の庶民たちの日常知とそれに基づく日常行動を規定した重要な一要因である「悪霊」表象に焦点を当てる。従って、取り上げられる資料は、ギリシア、ロ・マ、ユダヤ教、新約聖書、古代教会史、グノーシス主義、エジプトと多岐にわたる。現代人にとっては一見不可解な言葉で表現される「悪霊」表象の背後に、それぞれの文化圏で培われ、蓄積されてきた伝統的な表象法が存在すること、さらに、それが語り手と受け手(聞き手、読み手)の双方において共通の準拠枠を構成する時、現代人にとって不可解な表現もコミュニケーションの媒体として有効に機能することになる。多くの者が「心の病」に苦しみ、その癒しが切実な問題となっているわれわれの社会において、同じ苦しみを抱えた古代地中海世界の無告の民たちに言葉を取り戻すことは、「古典学の再構築」が見逃してはならない課題だと思われる。

【研究成果】

これまで本研究はマタイ12,43-45/ルカ11,24-26の次の記事を出発点として進められてきた。「汚れた霊は、人から出て行くと、水の無い場所をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出て来たわが家に帰ろう』と言う。そして、戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた。そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。」ここで注目されるのは、(1)「汚れた霊」に人間(「人」と動物(「うろつき」)のイメージが同時に重ねられていること、(2)追い出された霊が「水の無い場所」に「休む場所を探す」不可解さである。

本研究はこの2点を相互に関連させて、この記事の元の語り手が暗黙の内に、追い出された「汚れた霊」を狂犬病に罹った犬のイメージで表象しているのではないかという仮説を立てる。狂犬病は別名を恐水病(ὕδροφοβία / pavor aquae)と呼ばれる。それに罹った犬には、仮に水の無い所へ逃げても、最終的な安息は見つからない。この仮説の妥当性を論証するために、本研究はこれまで以下のような文献資料の発掘、蒐集、分析を行ってきた。

- (I) ユダヤ教およびキリスト教文献の証言：バビロニア・タルムード『ヨーマ』篇83b-84b, パレスティナ・タルムード『ヨーマ』篇8,45b,12, パレスティナ・タルムード『テルモート』1,40b,23, バビロニア・タルムード『ハギガ』篇3b, 『エルカザイの書』(ヒポリュトス『全異端反駁』IX,15,4-16,1)
- (II) ヘレニズム文化圏の証言：アリストテレス『動物誌』VIII,22, 大プリニウス『自然誌』XXIX,32, ディオスコリデース『薬剤について』II,49, ガレーノス『単純な薬剤の調合と効力について』XI,10, フィロストラトス『テュアナのアポロニオス伝』IV,10; VI,43, パウサニ阿斯『ギリシア記』VIII,3,19,2, ルキアノス『嗜好み』31, 『コプト語魔術文書』(London MS.OR.1013A), 『ギリシア語魔術文書』(PGM IV,1873-1929; XII,122-143; XVII,1-25; XIX,5-16)。

本研究はこれらの資料に基づき、これまでのところ以下のような分析と結論に達している。

(1) 先ず文献学的事実としては、ユダヤ教およびキリスト教の領域の証言とヘレニズム文化圏の証言のいずれにおいても、狂犬病とそれに伴う恐水症状の認識は明瞭に認められる。

(2) バビロニア・タルムード『ヨーマ』篇83b-84bにはラテン語からの借用語「カニス・コレリクス」(canis cholericus)が訛った形「カンデイ・カンデイ・クロロス」で現れ、パレスティナ・タルムード『テルモート』1,40b,23,そのパレスティナ・タルムードの並行箇所『ギッチン』7,48c,13,およびバビロニア・タルムード『ハギガ』篇3bにはギリシア語からの借用語 κύνθρωπος(犬人間)と λύκάνθρωπος(狼人間)がやはり訛った形で現れることが証明するとおり、これらのユダヤ教ラビ文献の背後には、少なくとも後一世紀にまで遡るヘレニズム文化圏の表象が潜んでいる。

(3) 同じことは、一方ではバビロニア・タルムード『ヨーマ』篇83b-84bとミシュナー『ヨーマ』篇8,6におけるラビ・マッテヤ、他方では大プリニウス、ディオスコリデース、ガレーノスが狂犬の(生の)肝臓を使った同一の処置法について報告している事実からも裏付けられる。引照されたラビ文献のほとんどはバビロニアのユダヤ教を起源とするものであるが、ヘレニズム文化圏からの影響は、バビロニア・タルムード『ヨーマ』篇83b-84bに並行するミシュナー『ヨーマ』8,6がそのことを証明する通り、パレスティナのユダヤ教を経由してバビロニアにまで達したものと考えられる。

(4) 狂犬病を悪霊のしわざとする見方、あるいは魔術と関連させる見方は、ユダヤ教およびキリスト教の文献の方には明瞭かつ頻りに確認される。ヘレニズム文化圏の文献でもフィロストラトス『テュアナのアポロニオス伝』IV,10には明瞭に現れている。

(5) 狂犬病、恐水病、悪霊論の三箇組は、マタイ12,43-45/ルカ11,24-26が初めて成立した時代にも存在したものと想定できる。この種の民衆の日常知にかかわる議論や表象は、本来きわめて息の長いものであり、変わるとしても非常に長い時間を要するからである。前述の悪霊に憑かれた「犬人間」あるいは「狼人間」についてのラビ文献の見方がマルコ5,1-20とほとんど変わるところがないのは、そのよい実例である。マタイ12,43-45/ルカ11,24-26の語り口も、ユダヤ社会において狂犬病に関してひろまっていた日常知を無言の内に前提していると考えられる。

以上の研究成果は1999年度の国際新約聖書学会(南アフリカ・プレトリア)で発表され、その後加筆補充の上同学会の機関紙 New Testament Studies 46 (Cambridge UP,2000)に印刷されている他、大貫隆『グノーシス考』(岩波書店,2000年1月)にも収録されている。